

韓国哲学 1

巫俗信仰(シャーマニズム)、無神論、現世肯定、血縁的連続性の中止、自我重複、人間関係、二元論の排斥、永遠性の否定、譲歩と妥協、ヌンチ
仏教、思想的統一、原始宗教克服、仏教王朝、元曉、風水思想、大藏経、曹溪宗、仏教の俗化、崇仏策、護国思想

1. 家族と生涯

無神論の世界観

韓国のシャーマニズムは、西洋の多くの宗教と異なり、神の存在を宇宙の中心に設定せず、宇宙全体が互いに階層なしに、統合された一つのものであると考える。従って、人間も自然のリズムに統合された一部分である。人間と自然は互いに全体を構成する部分であるため、一方が他方を制服したり恐れたりはしない。人間が最もよく暮らすせる方法は、自然のリズムに合わせてその流れに沿うことである。

一方、人間は自然の一部であるゆえ、いかなる超越した状態も認める必要がない。よって、韓国のシャーマニズムは、現在の生を積極的に肯定することとなる。結果的にシャーマニズムの人間はいかなる人間性の段階も認める必要がなく、魂と肉体の区別も無意味なものとなる。

結婚

韓国のシャーマニズムでは、結婚が個人間の結合ではなく家との結合であると考えられる。これは永遠性を認めないことに基づく、血縁的連続性の重視傾向であると言える。従って、ここで結婚が人生の拡大過程となる。人間は自然の一部であり、性に対して韓国シャーマニズムは自由である。現在私たちが性に対して偏見を持っているのは儒教の影響によるものである。一方、男と女は共に自然の一部であり、互いに対立せず、相補的な関係を結ばなければならない。女性に対して抱いている偏見もやはり儒教の影響である。

血縁関係

韓国人において血統の確認は、すなわち生そのものの確認である。従って親族関係は、孤独を脱出する手段であり、自己の人間性の保障でもあるわけである。これは血統の確認を通じて生の連続性を求めよう努力である。同じ脈絡で韓国人は親密な人間関係を最高の価値であると考ええる。これは個人の独自性を強調する西洋の価値観と互いに対立する。

人間関係の重視傾向は、身体的な接触の重視として現われる。赤子に最大限の身体的な接触を施す母親の真心は、おとなになって持つ憎悪心や敵対感を軽減する。

このように親密な人間関係は、人間との自我重複と考えられうるが、結果的に公式的、事務的な接触は忌避されることもある。

倫理

韓国人は人間関係を重視するため、人間関係の断絶を最大の罪悪であると考え、従って最大の刑罰は、個人を共同体から放逐することである。

一方、韓国人は感情の表現を人間性の表現であるとみなすため、相手の感情に障らないように努力する。これは個人に対する犯罪の防止に寄与する。

韓国人は現在の生に強い肯定感をもつため、思いがけぬ有名人の自殺は大衆に大きな影響を及ぼす。

つまり、シャーマニズム的な倫理は、絶対的な基準を認めず、状況によって可変的で相対的なものである。よって、善と悪の対立を拒否して両者を一つの連続体に含ませる。このような二元論の排斥は、国語の使用にもそのまま認められ、‘私’の代わり‘私たち’を用いる。

死

シャーマニズム的人間は、死も連続的な存在の一部と見なして来世に意味を見出さない。死体の早い消滅への願いは、自然のリズムにいち早く順応することに望む思いである。

韓国人は死者に格別の愛情を示す。これは人間関係を重視する態度が、死者にまで拡張されたものである。このような傾向は、適切な墓地を探すとか祭祀を執り行なうといった意識に現れる。

2. 社会と生活

永遠性の否定

シャーマニズム的な人間は永遠を信じない。すべてのものは繰り返えし循環する一時的な現象として把握するのである。従って、オルマクという事実を経験即によって信じている。

このような世界観によって、韓国人は自分の境遇に対する確信より、謙遜の姿勢を示すことになる。これは積極的な権利の行使を抑制する要因となる。

葛藤の解消

韓国人は公的な葛藤を裁判に寄ろうと思わない。何故ならば、善と悪の絶対的な基準を認めず、さらには判決が互いに敵対感を増幅させること考えるためである。従って、葛藤に対する最善の解決策は、譲歩と妥協となる。結局、互いの精神的な満足を最高の解決として考えるのである。

このような態度が公的な問題にまで拡張されると、相手の感情をあらかじめ推し量り、葛藤の原因を無くそうと努力することになるのであるが、ここに洗練された感覚(ヌンチ ㄱ)が現われる。

よって、罪は処罰するものの、このような場合にも当事者の人間性回復のために自白を最善の方法とする。もちろん人間性を尊重するという次元において死刑をはばかる。

政治

自然に対する調和の概念は、人間関係の尊重として発展し、ひいては、衝突するのを避ける傾向として現われる。言わば、シャーマニズム的な人間は、非政治的である。

このような態度のため、儒教の政治哲学が導入された時にも何ら抵抗はなく、時には独裁権力が現われてもこれを克服しようとする努力が認められなかったのである。むしろ人間関係の尊重は個人的な忠誠心(義理)に現われ、公的な政治に障害になることが多かった。

宗教的寛容

シャーマニズムは、それ自体が包容的な性格であったため、宗教の流入にも抵抗はなかった。シャーマニズムと外来の宗教は、互いに影響を及ぼし合いその基盤をさらに広げたのである。

3 韓国仏教の性格

仏教は372年に我が国に伝来した後、古代国家の思想的地主になってまた文化芸術の土台になった。したがって仏教は王室の積極的な保護と勸奨を受けたし、国民的な帰依を受けて国史上での位置は他のどんな外来思想より高く大きいのだった。

まず仏教は王権信者のスーダンと古代国家の思想的統一という目的によって収容されて発展したが在来の遠眼信仰を乗り越えてくれることで韓国人の認識体系や意識世界を一段階高めてくれた役目をした。またそれは現実的な口腹信仰と力強い護国信仰の性格を持つことで国民大衆と結合されて国家守護の精神的な役目を担当した。

また仏教は中国と西域の学問と芸術を伝え、塔、佛像、切れ、査察など芸術発展に元肥になることで民族文化発展にこの上なく大きい貢献をするようになった。しかし仏教は彼に反比例して国泰民安(国泰民安、国を呑気にさせて民を安定させ)の言い立てと貴族層の擁護の中で次第に俗画されて大きい社会問題が申し立てられたことを指摘することができる。

4. 韓国仏教

4.1. 韓国仏教の性格

仏教は372年に我が国に伝来した後、古代国家の思想的地主になってまた文化芸術の土台になった。したがって仏教は王室の積極的な保護と勸奨を受けたし、国民的な帰依を受けて国史上での位置は他のどんな外来思想より高く大きいのだった。

まず仏教は王権信者のスーダンと古代国家の思想的統一という目的によって収容されて発展したが在来の遠眼信仰を乗り越えてくれることで韓国人の認識体系や意識世界を一段階高めてくれた役目をした。またそれは現実的な口腹信仰と力強い護国信仰の性格を持つことで国民大衆と結合されて国家守護の精神的な役目を担当した。

また仏教は中国と西域の学問と芸術を伝え、塔、佛像、切れ、査察など芸術発展に元肥になることで民族文化発展にこの上なく大きい貢献をするようになった。しかし仏教は彼に反比例して国

泰民安(国泰民安,国を呑氣にさせて民を安定させ)の言い立てと貴族層の擁護の中で次第に俗画されて大きい社会問題が申し立てられたことを指摘することができる。

4.2. 三国時代の仏教

高句麗、百済の仏教

小樹林王 2 年(372)に、前秦の順道によってもたらされた高句麗の仏教は、王室の積極的な奨励によって、その基盤を固めることになった。相繼いで、丞分寺、伊弗蘭寺などの寺院が創建され、三論宗を中心とする宗派が大いに発展し、慧灌をはじめとする名僧を輩出した。

一方、百済は枕流王元年(384)に東秦から摩羅難陀が仏教がもたらし、謙益に代表される律宗が反映した。しかし、他の文化の場合と同様、百済の仏教は、貫革? (관혁) 等によって日本仏教が興されることになり、大きく貢献した。

新羅の仏教発展

ア) 仏教政策

高句麗、百済とは異なり、仏教の伝来過程において大きな試練を経た新羅は、異次頓(이차돈)の殉教により法興王 14 年(527)に公認された。しかし、一旦公認された後の仏教は国家の積極的な奨励により、三国中、最も栄えることになった。法興王の興輪寺、真興王の黄竜寺、宣徳王の芬皇寺などのような国家的な大寺院の建立は、これを示すものである。特に新羅は法興王以来、仏式の王命を用い、王の葬地がやはり寺院であることを考慮したとき、仏教王朝の一面を如実に現わすものである。また、この時には世俗五戒の圓光(원광)、黄竜寺九重塔建造を建議した戒律宗の慈藏(자장)、高句麗の帰化僧である涅槃組の宣徳など名僧を輩出した。

イ) 統一新羅の仏教宗派

統一後、仏教は変わらぬ王室の積極的な保護と奨励によって繁栄した。特に特定の宗派や教義が明確でなかった三国時代とは異なり、統一後には仏教の思想体系が確立され、元曉(원효)の仏教哲学が現われたのである。彼はさまざまな宗派を整理、調和しつつ仏教の大衆化に焦点を置き、浄土信仰を興した。このような元曉の仏教哲学は、韓国仏教上の一大革新であったと言える。

このような仏教の発展は、結局仏經の中心的施主の王室宗教である 5 教(教宗)と不立文字、眞性悟道?(진성오도)の豪族宗教である 9 山(禪宗)を生むに至った。5 教は涅槃宗普徳(보덕)、慈藏、法性宗(元曉)、華嚴宗(義湘)、法相宗(眞表)が挙げられるが、中でも華嚴宗が最も栄えた。

一方、統一新羅末期に流行した禪宗は、南宗禪系の道義の加智山をはじめ、9 山としてほぼ 6 等品系列の人物が開創した(開創 新たに始めるとか開くことの意)ため、地方の豪族勢力と結びつき、特に儒教、風水思想との結合によって高麗建国の精神的土台となった。このような仏教の発展は多くの寺院、塔、仏像など仏教芸術全般に燦爛たる姿を残している。

5. 高麗時代の仏教

.高麗初期の仏教政策

王健の崇仏策は、訓要十條の第1項で仏教を勸奨したものと現われ、燃燈会、八閏会の開催と須彌山の利嚴(이엄)を王師とするなど仏教王朝の基本方向を提示した。引き続き光宗は王事、国史提議を確立して、顯宗は大藏經の造版に取り掛かった。文宗は興旺寺を完成して挙国的仏教行事である燃燈会をここで開催した。かくして大党国師義天のような大僧が出現したのであり、このような僧侶の地位を定める僧科を置き、教宗選(僧統)、禪宗選(대사선)を設置した。

.仏教の宗派

高麗の仏教は、初めは新羅のそれを継承し、5教、9山に分けられていたが、義天が天台宗を開いた後には5教、両宗に代表された。両宗とは天台宗と曹溪宗を指すものであった。天台宗は、諦観、義通によって天台学を中国に伝えた後、義天により再び集成されたもので、華嚴(教宗)の立場から禪を統合しようとする教理である。

このような教禪思想の天台宗は、武臣乱(無官らの反乱)を契機として、反対の立場となった。すなわち、武臣乱以後の現実逃避的傾向は、自ずから禪中心の風潮が生じ、禪で教を統合するいわゆる定慧兼修の曹溪宗が台頭したのである。知訥(지눌)によって確立されたこの曹溪宗は、当時の社会矛盾を克服することはかなわなかったものの、一種の仏教系革新であったことは疑いのないことであった。かくして、このような曹溪宗はその後、朝鮮時代以後、韓国仏教系の主流となった。

6. 朝鮮時代の仏教

朝鮮前期の仏教政策

朝鮮時代は朱子学中心の王朝であったため、崇儒抑仏策によって一貫して仏教は大打撃を被った。しかし、長期にわたって仏教が維持してきた伝統と朝鮮初期の王の個人的な努力によって、仏教は極めて栄えた。すなわち、太祖の度牒制の実施や太宗の寺院整理の中でも仏教政策は絶えず推進されたため、このような例は、太祖時の無学、祖丘の王事、国史制や、世宗の内仏殿設置などに見出すことができる。それ以外にも、世祖の円覚社と刊経都監を通じる好仏策、明宗初期の文定王后による普雨(보우)の優待と崇仏策なども間歇的(intermittently)に継承された。

従って、朝鮮時代にも儒仏統合論の己和(기화)をはじめとして、臨濟宗の智嚴(지엄)、休靜(휴정)、惟政(유정)などの高僧大徳が耐えず輩出された。しかし、徹底的な儒教王朝の厳格な統制により、前王朝のような仏教の発展は期待されなかったのが事実である。

.朝鮮後期の仏教政策

抑仏策の中であって朝鮮仏教は政治、文化の上で大きな役割は期待されうべくもなかったが、壬辰倭乱の国難時に、休靜、惟政をはじめとした高僧が義兵を組織して救国隊列の指揮をとった。

しかし、その後**仏教**はまた**朱子学**中心の統治制度(ruling system)の下で萎縮し、政治の表舞台からほとんど消え去った。

そして、19世紀末、一連の開化運動の過程で我々は再び**仏教**の役割を見出すこととなる。劉大政(유대치)と李東仁(이동인)は、**仏教徒**として近代化に貢献した人物である。特に近代西洋文物と**新教**の伝来の中で展開された**韓竜雲**(한용운)の**仏教革新運動**は、民族文化と**国権**守護を意識した一大覚醒であったのである。

7. 仏教の役割とその影響

以上、我々は各時代毎に**仏教**の発展過程とそれに対する政策などのおおよそを探ってきた。つまるところ、**仏教**は、朝鮮王朝以前までは**韓国**民族文化の根源として**絶対的**な役割を担っていたという点を指摘することができる。また、朝鮮以後にもその潜在的な役割を無視することができなかつたのである。このような**仏教**の貢献や影響については、プロローグにおいておおよその輪郭を提示したが、次のように結論付けることができる。

第一、**仏教**は古代の**国民思想**を統一した**宗教**として**国家**の精神的な支柱となっただけでなく、**護国思想**として民族守護の理念的背景になったということである。このような**事実**は**モンゴル**が侵入した時の**江華島**での**八万大藏經**の完成、及び**壬辰倭乱**時の**義兵活動**で明らかな**実戦**的な一面を伺うことが出来た。

第二、**仏教**は前述したとおり、原始信仰段階に留まっていた**韓国人**の精神体制を一段階引き上げた思想であった。また、**仏教**は**中国**と**西域**の文化を伝来させ、**学問**、**芸術**、**文化全般**にわたって民族文化の発展の源泉になったという点である。**仏国寺**、**多宝塔**、**石窟庵**、**大藏經**など**民族芸術**の**精粹**は、**仏教**と密接な**関係**があるためである。

第三、しかし、**仏教**は**社会的**の**弊害**も多かった。**国家利益**と**国民**の**福祉**の名目によって頻繁に行われた**行事**と意識は、僧侶の**免税**、**免疫の特権化**と共に、**寺院経済**の問題として現われた**国家財政**を破綻させることになったのである。その上、僧侶の**政治参加**と**俗化**による**社会問題**は、結局**排仏論**(**仏教**を排斥しようとする主張)をもたらした。その上に**韓国****仏教系**が二分され、**対立**する様相を呈したことは、多くの**分科**の**乱立**(無秩序な**状態**に陥ること)と同時に新しい方向の模索を要請することになるのである。

8. 元曉の仏教思想

元曉の仏教思想

元曉(617-686)は、**三国**統一前後に活躍した名僧として**韓国****仏教哲学**を体系化した人物である。彼は**六等二品**の家門に生まれたが、**当時**ほとんどの名僧が入唐求法していることに対して彼は**入唐留学**に**反対**し、**大僧**の**真理**を悟った名僧である。

彼の**仏教観**は、第一に**仏教**の様々な宗派の**対立**を止揚して、**相互調和**、**統一融合**を主張したものである。すなわち、**仏教家**の**典籍**がそれぞれ相異なる**系譜**をもっているものの、究極的には**公平**、**無私**な一つに通じ得るというものである。

第二、彼の代表作である「大乘起信論疏 (대승기신론소)」に現わされているように、**覚**の哲学が彼の**顕著な思想的特徴**である。各に**本覚**と**始覚**があるが、**両者**はそれぞれ**先驗**、**後驗**のものとして把握するが、**両者**の**相関関係**から**覚**を解いている。しかし、**覚**は**根本的に心の在り方**に存するものであるが、**知と観**とを通じる**実践的な姿勢(心)**に求めようとする心**に帰着**すると解いた。

第三、元曉の**仏教観**は**衆生の救済**と**仏教の大衆化**にある。すなわち、**穢土**、**浄国**も**本来一心**にある**極楽世界**へ行くことができ、誰しもが**‘南無阿弥陀仏’**を唱えて**阿弥陀経**を聞けば**極楽世界**へ行くことができ、誰しもが**成仏**することができる**と説いた**のである。従って、**凡夫**も**往生**することができる**という彼の来世想像**と**仏教の大衆化**は、いわば**浄土信仰**として**新羅仏教**の**独自の境地**を開拓した。

元曉の**仏教思想**の位置

元曉は、**六等品家門**に生まれ、**一生を仏教思想の総合とその実践**に心血を注いだ。換言すれば、**大乘小乗仏教の対立**と**大乘仏教内の分裂**を克服する一方で、**従来**の**シャーマニズム**的な**原始宗教**を超越し、**仏教哲学**において一つの**思想、認識体系**を築いたもので、**実践のための仏教革新運動**を展開したと言える。ここで**仏教の大衆化**は**勿論**、**高麗**以後、**曹溪宗**が成立した**背景**となったという点に彼の**仏教思想**の位置が**確定**される。

1. シャーマニズムの最も重要な特徴は多元主義であると言えますが、このような特徴が韓国人の思考方式にどのように影響を及ぼしたについて話してみましょう。
2. 仏教が韓国歴史に寄与した部分は何ですか？

この時間では韓国哲学1について学習しました。

次の時間では韓国哲学2について学習します。

お疲れ様でした。